# 百二十周年記念誌追録

２０２１

弓削商船高等専門学校

# 目　　　次

記念行事及び開催日時 ........ 1
記念講演会 ........ 1
田坂初太郎氏の胸像除幕式実施概要 ........ 2
記念式典実施概要 ........ 2
記念式典 ........ 3
　式辞　石田邦光弓削商船高等専門学校長 ........ 5
　祝辞　塩川達大文部科学省高等教育局専門教育課長 ........ 7
　祝辞　中村時広愛媛県知事 ........ 8
　祝辞　上村俊之上島町長 ........ 9
　祝辞　檜垣幸人今治造船グループ代表 ........ 10
　祝辞　酒迎和成全日本船舶職員協会会長 ........ 12
　祝辞　谷口功国立高等専門学校機構理事長 ........ 13
　祝詞・祝電・祝花 ........ 15
慰霊祭実施概要 ........ 16
慰霊祭 ........ 17
弓削商船高等専門学校創基１２０周年・高専創立５０周年記念事業後援会会則 ........ 18
弓削商船高等専門学校創基１２０周年・高専創立５０周年記念事業委員会設置規則 ........ 20
寄附一覧 ........ 21
編集後記

# ＜記念行事及び開催日時＞

| | |
|---|---|
| 記念講演会 | 令和 3 年 10 月 28 日（木）15:00～16:30 |
| 田坂初太郎氏胸像除幕式 | 令和 3 年 11 月 12 日（金）10:10～ |
| 記念式典 | 令和 3 年 11 月 12 日（金）11:00～12:30 |
| 慰霊祭 | 令和 4 年　1 月 11 日（火）10:00～ |

※記念祝賀会については、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となりました。

# ＜記念講演会＞

10 月 28 日（木）に本校創基 120 周年及び高専創立 50 周年を記念し、学生向けに記念講演会を開催しました。

講演者に本校卒業生（1986 年航海学科卒）でライトハウス会長　込山洋一様をお迎えし、「『目指すべき山』と『登山ルート』を考えよう」をテーマに講演を行っていただきました。

学生会長の情報工学科 4 年生今井洸樹学生がファシリテーターを務め、込山様の豊富な経験に基づいた有意義なお話をしていただき、最後は、若い後輩たちにこれから生きていくうえで意識してほしいことを伝え、素敵な山に登るような人生を送ってほしいとエールを送り、講演を締めくくりました。

講演会の様子　込山様（写真右）と今井学生（写真左）

## ＜田坂初太郎氏の胸像除幕式実施概要＞

日　時：令和 3 年 11 月 12 日（金）10:10～

場　所：弓削商船高等専門学校　管理棟 1 階ロビー

式次第：①　開式の辞

②　同窓会長挨拶

③　寄贈社挨拶

④　除幕

⑤　閉式の辞

## ＜記念式典実施概要＞

日　時：令和 3 年 11 月 12 日（金）11:00～12:30

場　所：弓削商船高等専門学校　第 2 体育館

式次第：①　開式の辞

②　君が代斉唱

③　校長式辞

④　来賓祝辞

1　文部科学省高等教育局専門教育課長

2　愛媛県知事

3　上島町長

4　今治造船グループ代表

5　全日本船舶職員協会会長

6　国立高等専門学校機構理事長

⑤　感謝状贈呈

1　戸田汽船株式会社

2　日本ペイントホールディングス株式会社

3　正栄汽船株式会社

4　三徳船舶株式会社

5　ワールドマリン株式会社

6　株式会社光電製作所

7　株式会社 LAC ホールディングス

⑥　祝電披露

⑦　記念事業後援会長謝辞

⑧　校歌斉唱

⑨　閉式の辞

## ＜記念式典＞

令和 3 年 11 月 12 日（金）、弓削商船高等専門学校創基 120 周年・高専創立 50 周年記念式典を本校第 2 体育館で開催し、国会議員、広島県・愛媛県自治体、県内外の高等教育機関の長、関連企業・団体の代表者、同窓会の皆様、本校の退職教職員及び現職教職員ら約 120 名の臨席をえて開催し、多数の祝電・祝詞、お花を賜りました。

本式典は、新型コロナウイルス感染予防対策のため、来賓及び教職員のみの出席とし、座席の間隔を空けるなどの対策を行ったうえで挙行しました。

本校は、明治 34 年（1901 年）に弓削海員学校として設置されて以来、令和 3 年 1 月で 120 周年を迎え、また、平成 29 年（2017 年）には、高専創立 50 周年を迎えました。

式典では、石田邦光校長が「創立以来、先輩諸氏が築き上げ、蓄積された海事技術者の教育養成の伝統と実績を基礎として、これからも時代の先を見据え、急激に変化する社会や科学技術の進歩に対応し、地域社会からの要望に柔軟に対応できる実践的技術者の育成に努めていく」と式辞を述べました。

文部科学省高等教育局　塩川達大専門教育課長（代読：柳瀬貴司高等専門学校係長）、中村時広愛媛県知事（代読：末永洋一愛媛県東予地方局長）、上村俊之上島町長、檜垣幸人今治造船グループ代表、酒迎和成全日本船舶職員協会会長、谷口功国立高等専門学校機構理事長から祝辞をいただきました。

続いて、創基 120 周年・高専創立 50 周年記念事業に多大なご芳志をいただいた企業に対し、感謝状贈呈が行われ、最後に柏木実記念事業後援会長が謝辞を述べました。

また、式典に先立ち、本校管理棟 1 階ロビーにおいて、日本ペイントホールディングス株式会社ら関係者による田坂初太郎氏の胸像除幕式が行われました。

本校は、教職員一同、教育・研究・地域貢献に邁進するよう努力を続けてまいりますので、今後とも本校へのご協力とご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

式辞を述べる石田校長

祝辞を述べる
柳瀬高等専門学校係長

祝辞を述べる
末永愛媛県東予地方局長

祝辞を述べる
上村上島町長

祝辞を述べる
檜垣今治造船グループ代表

祝辞を述べる
酒迎全日本船舶職員協会会長

祝辞を述べる
谷口国立高等専門学校機構理事長

謝辞を述べる
柏木記念事業後援会長

田坂初太郎氏の胸像除幕式

田坂初太郎氏の胸像

## ＜式辞　石田邦光弓削商船高等専門学校長＞

海から吹く風に秋の深まりを感じる今日の佳き日に、多数のご来賓の方々にご臨席を賜り、ここに弓削商船高等専門学校創基120周年ならびに高専創立50周年記念式典を挙行できますことは、誠に大きな喜びであり、衷心より御礼申し上げます。これもひとえに、本校教育の充実・発展にご支援をいただきました地元上島町の皆様方や保護者の方々、さらには歴代校長をはじめ旧教職員・同窓生の皆様のおかげであり、深く感謝申し上げます。

弓削商船高等専門学校の歴史は、今から120年前の明治34（1901）年、ここ弓削の地に船員教育機関として、修業年限3年、生徒定員120名の弓削海員学校が創設されたことに始まります。当時の日本海運にあっては、大型船の幹部職員の多くは欧米人で、日本人船員達は、その下で過酷な労働を強いられていました。甲種船長の筆頭で実業家でもあった田坂初太郎氏は、こうした日本人船員の屈辱的な実情を見かね、生まれ故郷である弓削島に海員学校の設立を決意されました。当時の弓削島は教育への意欲が大変高く、村長中村清二郎氏を初めとする村民有志の方々並びに地元で甲種船長や甲種機関長となった有志たちとともに、設立に向けて献身的な努力を払われました。そして、翌年の明治35（1902）年には、弓削甲種商船学校となりました。

本日は、本式典に先立ち、関係各位のご臨席の下、田坂氏の胸像除幕式も挙行させて頂きました。

その後、明治41（1908）年に愛媛県に移管され弓削商船学校と改称しました。当時は、北海道から鹿児島までの全国に11の商船学校がありましたが、昭和7年の世界恐慌による海運不況で、多くの地方商船学校は廃校となり、現在高等専門学校として存続する本校、富山、鳥羽、広島、大島の5校が残りました。昭和15（1940）年に愛媛県から国に移管されたのち、文部省から運輸省への移管を経て、昭和26（1951）年には再び文部省へ移管し、本科3年専攻科2年の実質5年制の弓削商船高等学校となりました。

そして、商船教育内容を充実するため、全日本船舶職員協会の前身であります全国商船学校十一会をはじめ、地元町長や町議会も含む関係者の絶大なるご支援の下、昭和42（1967）年、弓削商船高等専門学校が誕生しました。以後、地元の皆様のご協力のもとに、歴代の教職員及び学生の努力の結果、本校は、施設、内容ともに高等専門学校にふさわしい教育機関に成長いたしました。

昭和60（1985）年、機関学科一学級を改組して電子機械工学科が設置され、さらに、昭和63（1988）年、船舶運行技術の近代化並びに高度情報化社会に対応すべく、航海学科、機関学科を、航海コースと機関コースを有する一学級の商船学科に統合すると同時に、新たに情報工学科を設置いたしました。

平成16（2004）年には、独立行政法人国立高等専門学校機構弓削商船高等専門学校となり、現在では、本科に商船学科、電子機械工学科、情報工学科の3学科、専攻科には海上輸送システム工学専攻、生産システム工学専攻の2専攻を擁する高等教育機関として発展し

ました。そして、海洋立国日本を支える海事技術者ならびに工学技術者を養成する高等教育機関として、これまでに多くの卒業生・修了生を、社会に送り出してきました。彼らは、実践的な技術を身につけた第一線の技術者として、産業界の発展に寄与するとともに、広く社会に貢献しています。

さて、商船系高等専門学校は、多くの海事技術者を社会に輩出し、海洋立国日本を支えてきた学校です。近年のグローバル化、少子化の中で、創設時からの使命である船員養成という社会的要請と新たな海洋産業への対応に応えるため、全国 5 校の商船系高等専門学校と共同で、産業界とも連携し、より質の高い海事人材の育成を目指した教育システムの改善に取り組んでいます。

平成 18 年度文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）の一環として「海事技術者のキャリア育成プログラム」事業に取り組んで以来、数々の事業・プロジェクトを経て、現在は、文部科学省の「国立高専における次世代の海洋人材の育成」事業の一環として「海事・海洋分野の人材育成事業」を推進しています。このプロジェクトでは、これまでの事業において開発されてきた多くの先進的な共同教育プログラムを発展させ、グローバルな海洋人材の育成、最新の海上輸送技術の動向や将来の技術革新に対応する高度な専門教育の実践、産学の強固な連携によるキャリア教育の展開など、次世代の海事人材に求められる海運業界からのニーズに応えるべく取り組んでおります。

一方、工学系の技術者の人材育成に関しては、平成 30 年度文部科学省支援事業「“KOSEN（高専）4.0”イニシアティブ」に「離島工学に基づく防災・減災に精通した IoT 技術者育成プログラム」が採択されました。これは、本校が立地する離島の特性を踏まえ、災害時の離島住民の安全・安心を守ることを目的に、災害時に臨機応変に行動でき、かつ「離島工学」に基づく防災減災に精通した IoT 技術者の育成を目指すものです。「離島工学」とは、災害時の離島住民の安全・安心を守るには、本校の工学的、人的資産を活用して、工学的視点から地域コミュニティと本校が連携して問題を解決することで、この「離島工学」は本校学生の教育における大きな柱となりました。

120 年間の長い歴史の中で、本校は船員教育機関から工学系学科を包含する高専になりましたが、創立以来、先輩諸氏が築き上げ、蓄積された海事技術者の教育養成の伝統と実績を基礎として、これからも時代の先を見据え、急激に変化する社会や科学技術の進歩に対応し、地域社会からの要望に柔軟に対応できる実践的技術者の育成に努めていく所存でございます。

最後になりましたが、本日ご臨席賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。また、日頃より本校の発展にご尽力をいただいている皆様方に改めて感謝申し上げますとともに、今後とも弓削商船高専へのご協力とご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げまして、式辞といたします。

## ＜祝辞　塩川達大文部科学省高等教育局専門教育課長＞
## （代読：柳瀬貴司高等専門学校係長）

本日ここに、弓削商船高等専門学校創基百二十周年・高専創立五十周年記念式典が挙行されますことを心よりお慶び申し上げます。

弓削商船高等専門学校は、明治三十四年に創設された弓削海員学校を母体とし、昭和四十二年に国立弓削商船高等専門学校となりました。その後、工業技術者の育成に対する産業界からの強い要望に応え、昭和六十年に工業系学科を設置し、海洋立国日本を支える船舶職員養成学校に留まることなく、高度な専門知識と実践力を身に付けた優秀な工業技術者を数多く社会へ輩出され、輝かしい実績を積み上げてこられました。

さらに、離島に所在する数少ない高等教育機関として、離島の抱える課題を地域コミュニティと連携し工学的視点から解決する取組を行い、地元上島町（かみじまちょう）の地方創生に貢献されております。また、海外の海洋系教育機関等との連携など、海事分野における教育研究協力の促進にも努めておられます。

これまで幾多の困難や課題を乗り越え、創基百二十周年・高専創立五十周年を迎えられましたのは、石田校長をはじめとする歴代の校長先生、教職員の皆様、また、愛媛県、上島町（かみじまちょう）等の自治体をはじめとする弓削商船高等専門学校を支援してこられた数多くの皆様のご尽力の賜物であり、関係各位のこれまでの御貢献に心から敬意を表します。

近年の社会経済環境の変化や求められる知識・技術の高度化に伴い、五年又は五年六月一貫の実践的専門教育を行う高等専門学校への期待はますます高まっており、文部科学省といたしましても、高等専門学校の更なる発展のために必要な支援に努め、将来の我が国を担う実践的・創造的技術者の育成に一層力を注いで参ります。

弓削商船高等専門学校におかれましては、校訓にもあります「みなぎる気力」と「たゆまぬ努力」により、今後も優れた技術者の育成と地域社会への貢献により一層努められることを期待しております。

結びに、本日御臨席の皆様におかれましては、引き続き弓削商船高等専門学校に対する御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様方の御健勝と、弓削商船高等専門学校のますますの御発展を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

## ＜祝辞　中村時広愛媛県知事＞
## （代読：末永洋一愛媛県東予地方局長）

本日、弓削商船高等専門学校創基 120 周年・高専創立 50 周年記念式典が盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

弓削商船高等専門学校におかれましては、明治 34 年に愛媛県越智郡弓削村外 1 ヶ村学校組合立弓削海員学校として創設されて以来、校名や所管など、幾多の変遷を経ながら、長きにわたり、海運界のみならず我が国の産業界を支える有為な人材を多数輩出され、本県の発展に多大な御貢献を賜っております。

そしてこのたび、創基 120 周年という記念すべき節目を迎えられましたことは、誠に御同慶の至りであり、石田校長をはじめ、歴代校長や教職員、卒業生等関係者の皆様方の熱意とたゆまぬ御努力に対しまして、深く敬意を表します。

さて、四方を海に囲まれた我が国において、海事産業は国民経済を支える基盤であり、海洋権益を巡り国際競争が激化する昨今、安全保障やエネルギー政策などの観点からも、海運業の競争力強化が重要な課題となっております。

こうした中、貴校におかれましては、国内有数の海事産業の集積地である本県東予地域の知の拠点として、多様な人材の育成はもとより、上島町や地元企業と連携した共同研究の実施、小中学校での研修・学習支援、地域住民に向けた公開講座の開催など、地域の経済や産業の発展、更には地域貢献活動にも尽力されており、大変心強く存じます。

どうか皆様方には、創基 120 周年を契機に、相互の結束を一層強固なものとされ、今後とも、社会変革に的確に対応できる専門性の高い人材の育成等を通じ、本県の持続的な発展にお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

終わりに、弓削商船高等専門学校の限りない御発展と、御出席の皆様方の御健勝、御活躍を心からお祈り申し上げまして、祝辞といたします。

## ＜祝辞　上村俊之上島町長＞

本日の良き日に、弓削商船高等専門学校の創基 120 周年が、このように盛大に開催されますことを、上島町民を代表いたしまして心からお祝いを申し上げたいと思います。

この記念式典にあたりましては、石田校長先生をはじめ学校関係者の皆様、同窓会の皆様、様々な方のお力添え、ご支援をいただいたことにも心から感謝を申し上げます。

本日の来賓の皆様もお忙しい中、様々なところから駆けつけてくれております。先ほどご挨拶のありました知事代理 東予地方局長 末永 様、文部科学省の皆様、愛媛県議会 中畑議長、今治造船グループ 檜垣社長、独立行政法人の谷口理事長、大勢の来賓の皆様がこの上島町にお越しになりましたこと、重ねて歓迎を申し上げたいと思っております。

さて、田坂初太郎氏、私たち上島町弓削島の恩人の実績については、皆さまからもご案内の通りです。御親戚となる家屋は今も弓削下弓削にございまして、立派な母屋大きな庭園等、素晴らしい歴史として残っております。上島町といたしましてはこの遺産をしっかりと大切にしていきたいと思っております。

上島町は田坂氏をはじめとする大きな歴史がありますが、この度、文科省の方から弓削島荘遺跡として国の史跡指定を受けました。また、今の天皇陛下が学生の時には、卒業論文作成の為にこの弓削島にお越しになっており、その中には、この上島町のことが多く書かれております。このように歴史と豊かな文化に育まれた島ですので、今後とも皆様のご支援をいただきたいと思っております。

今日のこの式典が素晴らしい青空に恵まれましたように、上島町も新たなステージを迎えています。天の時として令和 4 年 3 月の岩城橋完成をもって、ゆめしま海道が全線開通となります。これは、本日お越しの国会議員の先生方並びに、愛媛県、様々な方々のご尽力をいただきまして達成できた偉業です。このゆめしま海道開通によりまして更に大きな人と人との交流が始まり、経済も大きく発展するものと期待しております。

次に、地の利として、この弓削商船高等専門学校が大きく世界に目を広げて進まれた航海のように、今は全世界からこの瀬戸内海が注目されているところです。その中でも上島町は大きな橋が 3 本架かり、こんなにも素晴らしい景観はほかにないという評価もいただいておりますので、これからは全世界の方々がこの弓削の島に訪れてくれると思っております。

ただ、何よりも大事なのは人の輪です。今日お越しの皆様方のお力添えをいただきましてこれからも上島町が少しでも発展するように、そして、この弓削商船高等専門学校が更に大きく羽ばたきますように、心から祈念申し上げましてご挨拶とさせていただきます。

本日は誠におめでとうございます。

## ＜祝辞　檜垣幸人今治造船グループ代表＞

ただいまご紹介頂きました、今治造船 社長の檜垣でございます。

ご指名でございますので、僭越ながらお祝いの言葉を述べさせて頂きます。

まずもって、この度、弓削商船高等専門学校が創基120周年、また高専創立50周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。石田校長先生はじめ教職員、在校生の皆様、また卒業生の方々並びに関係皆様方のお喜びも、ひとしおのことと存じ上げます。そして、本日、このように盛大な記念式典の席にお招きいただき、お祝いの言葉を述べる機会まで頂戴し、心より厚く御礼申し上げます。

さて、弓削商船高等専門学校は、我々今治造船の創業と同じ、明治34年・1901年に弓削海員学校として発足され、商船学校、商船高等学校と昇格を経て、昭和42年に国立弓削商船高等専門学校として創立されました。その後、日本の海運業界や産業界からのニーズや時代の変化に合わせ、学科の改編や新設を重ねて参られました。現在は、商船学科、電子機械工学科、情報工学科に加え、工学専攻科を設けられ、専門技術の基礎力を養う教育に積極的に取り組まれております。これまでの卒業生・修了生は約7600人を数え、海運業界をはじめとする海事産業界のみならず、幅広い産業の発展に多大なるご貢献をされて参りました。その長年にわたるご功績に、改めまして、深く感謝申し上げますとともに、本日、創基120周年、高専創立50周年を迎えられましたこと、改めまして、お慶びを申し上げる次第でございます。

私ども今治造船グループでは、1962年に設立しました船舶保有会社でございます“正栄汽船”にて、商船学科で5年半の経験を積んでこられた優秀な卒業生の方々を、海務、工務の即戦力として育成するべく、長年にわたり採用を続けております。同窓会会長でございます柏木実様をはじめ、正栄汽船の中枢を担う人材として、歴代、多くの方々に活躍頂いております。このように、学生生活のなかで、基礎力、実践力を身につけられた方々に勤めて頂くことで、徹底した船舶管理や安全航海を続けることができておりますが、国内外の荷主様やオペレーター様から、高い評価を頂いているのではないかと思っております。今や、正栄汽船は今治造船グループの中核を担うとともに、海事都市今治を代表する船主の一社として数えられております。

また、世界一の海事産業の集積地であります今治においても、多くの卒業生の皆様が、船主様や造船所、舶用メーカー様でご活躍されておりますように、海事都市今治の発展を支えてこられましたのも、弓削商船の卒業生の皆様のお陰であると言っても過言ではないと思っております。

これからも弓削商船殿におかれましても、商船学科のみならず、電子機械工学科、情報工学科など、それぞれの分野で、専門技術の基礎力を養う教育を更に徹底頂き、高度化、多様化する世の中のニーズに柔軟に対応できる人材、国際的な感性を持つ人材を育成されますことを心より期待しております。

また、より多くの卒業生の皆様に、将来、海事産業に従事して頂けるよう、我々も、造船所でのモノ作りや船会社の世界観など、業界の魅力を情報発信して参りますので、何卒ご協力、ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

最後になりますが、弓削商船高等専門学校の創基 120 周年並びに高専創立 50 周年を迎えられましたこと、改めまして、お祝い申し上げますとともに、これを契機と致しまして、益々のご発展と更なるご隆昌を心よりご祈念申し上げまして、簡単ではございますが、私からのお祝いのご挨拶とさせていただきます。

本日は誠におめでとうございました。

## ＜祝辞　酒迎和成全日本船舶職員協会会長＞

本日は、弓削商船高等専門学校創基百二十周年・高専創立五十周年記念式典が盛大に挙行されますことを、心からお慶びを申し上げます。そして、全船協を代表して祝辞を述べる機会を与えて頂き、誠に光栄に存じます。

明治三十四年、瀬戸内海の交通の要衝の地に弓削商船が誕生し、明治、大正、昭和、平成、令和と続く、この百二十年の長きにおいて、御校は幾多の優秀な商船士官を輩出され、日本国海運の発展・維持に貢献されてきたことは、海運界の万人が称賛するところであります。これからも内航・外航を問わず安全運航を担う海技者養成教育に邁進されることを期待しております。

さて、全船協は、昭和五年に練習帆船・日本丸及び海王丸を全国商船学校十一校の総力を挙げて建造を実現したことを契機に「全国商船学校十一会」を結成し、昭和四十五年に「全日本船舶職員協会」と名称変更し現在に至っております。

昨年、全船協九十年史の発刊に際し、昭和二十六年から昭和四十七年まで、第六代会長であった小山亮会長の海運界でのご活躍を改めて認識し、まさに全船協・中興の祖であると感銘致しました。小山会長は、大正八年、御校・航海科のご卒業であります。卒業後、十年間の海上勤務の後、陸に転じられ、昭和十一年に衆議院議員に当選されご活躍されました。昭和二十六年に「全国商船学校十一会」の復活と同時に会長に就任され、戦後復興の混乱期から経済成長期の海運界にあって、昭和四十五年、全日本船舶職員協会の設立に至る迄、海運界を導いて頂いたのであります。本日、皆さん方とともに弓削商船の大先輩である小山亮会長のご功績を称えたいと存じます。

私は、平成三十年六月に会長に就任致しましたが、八月には、文部科学大臣に面談を申し入れ、予てよりの懸案であった、商船五校の定員二百名の維持、五校練習船の代替建造及び商船高専への運営交付金の維持などを直訴致しました。

令和元年に五校練習船代替建造が文科省で検討されることになり、全船協は、四月に建造支援活動を決議し、国会議員の先生方に陳情を開始しました。九月に入り、海事振興連盟会長に直接陳情したことが、代替建造に拍車がかかりました。そして、十一月九日、自民党本部に五校練習船代替建造促進期成会のメンバーが集結し決起集会を開催し、国会議員の先生方とともに、文部科学大臣に面談し、代替建造要望書を提出致しました。

その結果、年末には建造調査費が認められ、翌　令和二年には補正予算及び令和三年度予算が確定し、第一船の建造に着手出来た次第です。

そして、本年は年末まで、第二船の新弓削丸の予算が審議されますので、引き続き、関係する国会議員の先生方や関係官庁に働きかけを行って参ります。

このような全船協の活動が出来るのも、歴史のある五校同窓会はじめ　全船協の会員の皆様方のご支援及び学校関係者の皆様方のご理解の賜物だと感謝しております。

最後になりましたが、弓削商船高等専門学校におかれましては、新型コロナ禍を乗り越え、地元の皆様方と共に、益々発展されますことを　心から　ご祈念申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

## ＜祝辞　谷口功国立高等専門学校機構理事長＞

独立行政法人・国立高等専門学校機構・弓削商船高等専門学校が創基百二十周年、高専創立五十周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

本日、創基百二十周年の祝賀の式典にあたり、全国の五つの商船系学科を有する高等専門学校（高専）を含む五十一の高専の設置者でございます国立高等専門学校機構を代表いたしまして、一言お祝いの言葉を申し上げます。

ご承知の通り、弓削商船高等専門学校は、明治三十四年（一九〇一年）一月に弓削海員学校として発足以来、昭和二十六年（一九五一年）に弓削商船高等学校、昭和四十二年（一九六七年）に弓削商船高等専門学校を経て、今日まで、百二十年間の永きにわたり、優れた海事技術者並びに工学技術者を多数輩出してこられました。今日では、商船学科のほか、電子機械工学科、情報工学科、また、専攻科には、海上輸送システム工学専攻および生産システム工学専攻を有する我が国有数の商船系高等専門学校となっています。

これも、ひとえに、現、石田校長先生はじめ歴代の校長先生、教職員の皆様方のご努力と卒業生や保護者の皆様のご支援、さらには、地域や関係者の皆様方のご指導ご鞭撻の賜物であり、ここに、改めて、感謝申し上げますと共に、皆様方のこれまでの多大なるご尽力に心から敬意を表します。

国立高等専門学校は、平成十六年（二〇〇四年）四月から全国の高等専門学校（高専）が、独立行政法人国立高等専門学校機構（高専機構）のもとに一つの法人となり、それぞれの高専の個性化を進展させると同時に、設置者である高専機構と一体となって、全国の高専各校と共に、教育研究、人材育成の一層の高度化・国際化を図るための取組みなど、新たな歩みを進めています。

現在では、全国に五十五のキャンパスを擁する五十一の国立高専が一つの法人として活動しており、各学校の枠を超えた課題に対しても一体となって果敢に取り組んでいます。その中で、新しい社会に対応した、実践的で創造力に富み、かつ、感性豊かな技術者や時代のリーダーを育成するという使命を果たすために日々努力を重ねています。

昨今、我が国をはじめ世界が、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大に翻弄される中、高専は、その人財育成　（人材の財の文字は、社会の財産という意味で、財産の財の文字を当てて記載しています）　の重要性に鑑み、対面の授業を重要視して、数々の困難を乗り越えた取り組みを進めてまいりました。

学生諸君も長くまた厳しい航海実習など、様々な訓練を経て、大きく成長してくれていることは、皆様ご承知の通りです。

皆様のご支援のおかげで、高専は、特に実践力と次の時代を切り拓くための創造性を兼ね備えた我が国の基盤的な人財の育成を通して、社会の発展に貢献する人財育成機関としての認識を新たにしていただいています。もとより、国立高専は、我が国の国立の高等教育機関として最大の学生数（全体で五万五千人を擁し、海洋関係の学生も千人を越える）を擁す

る組織で、その役割も責任も極めて大きい人財育成機関です。皆様のこれまでの努力のおかげで、国立高専は、産業界はじめ、教育界、加えて近年特に、国際社会からも極めて高い評価を頂いています。今日、高専は、「KOSEN」として国際語となり、高専が輩出する人財は、人の幸せや社会の発展に貢献する「社会のお医者さん（Social Doctor）」として、まさに社会の基盤を担う人財として理解されています。

周知の通り、我が国は世界六位の海洋面積（体積では世界四位）を有する世界に冠たる海洋国であり、その貿易の九十九.七%（重量ベース）を海洋物流に依存する現状にあります。

また、船舶は、近年の様々な災害に際しても、物資の運搬はもとより、人を救助することにも大きな役割を果たしています。まさに、船舶は、我々の生命線と言っても過言ではない極めて重要な役割を果たしています。

今日、弓削商船高等専門学校は、その伝統と実績によって、我が国の発展を支える海洋関連人財、広くマリンエンジニアリング人財の主要な育成機関として、海洋国日本にとって、我が国の海運を支える重要な社会の財産、宝である人「財」の育成に対して、社会からの期待が益々大きくなっています。

そのご期待を裏付けるものとして、弓削商船高専を含めて、各商船系高等専門学校の実習船の新規建造も、各界の皆様のご支援によって、現実化しつつあります。来年、大島商船の新しい実習船が完成予定です。また、弓削商船の船も、それに引き続いて、来年度と再来年度をかけて建造される予定です。

弓削商船高等専門学校におかれましては、高い志で社会から課せられた重要な役割を、これからもしっかりと担っていただくために、我が国の五つの商船系高等専門学校とも連携して、社会のニーズと期待に応える特色ある教育研究活動を実施し、実践性や創造性を重視した人財育成に邁進していただきたいと思っています。

創基百二十周年を契機として、気持ちを新たに次の百年に向けて船出されることを確信しています。

結びに、弓削商船高等専門学校の創基百二十周年あたり、今日までご支援いただきました関係者の皆様に、重ねて、御礼申し上げます。

また、皆様には、今後とも引き続き、弓削商船高等専門学校に温かいご支援ご指導をお願い申し上げますとともに、皆々様の益々のご発展とご健勝を祈念いたしまして弓削商船高専、創基百二十周年のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は、誠におめでとうございます。また、ありがとうございます。

# ＜祝詞・祝電・祝花＞

| | | |
|---|---|---|
| 祝詞 | 総務副大臣　参議院議員 | 中西　祐介　殿 |
| 祝電 | 参議院議員 | 山本　順三　殿 |
| 祝電 | 広島県議会議長 | 中本　隆志　殿 |
| 祝電 | 一般社団法人日本船主協会会長 | 池田潤一郎　殿 |
| 祝電 | 独立行政法人海技教育機構理事長 | 田島　哲明　殿 |
| 祝電 | 愛媛大学長 | 仁科　弘重　殿 |
| 祝詞 | 海上保安大学校長 | 葛西　正記　殿 |
| 祝電 | 神戸大学長 | 藤澤　正人　殿 |
| 祝電 | 東京海洋大学長 | 井関　俊夫　殿 |
| 祝電 | 長岡技術科学大学長 | 鎌土　重晴　殿 |
| 祝詞 | 大島商船高等専門学校長 | 古莊　雅生　殿 |
| 祝電 | 富山高等専門学校長 | 賞雅　寛而　殿 |
| 祝電 | 潮冷熱株式会社　代表取締役社長 | 小田　茂晴　殿 |
| 祝電 | 内海造船株式会社　取締役社長 | 原　耕作　殿 |
| 祝電・祝花 | 株式会社愛媛銀行　会長 | 本田　元広　殿 |
| 祝電・祝花 | 株式会社愛媛銀行　頭取 | 西川　義教　殿 |
| 祝電 | 愛媛銀行弓削支店　支店長 | 加藤　剛文　殿 |
| 祝電 | 川崎汽船株式会社　代表取締役社長 | 明珍　幸一　殿 |
| 祝電 | 川崎汽船株式会社　専務執行役員 | 綾　清隆　殿 |
| 祝花 | 正栄汽船株式会社　代表取締役社長 | 檜垣　幸人　殿 |
| 祝電・祝花 | 株式会社日本海洋科学　代表取締役社長 | 赤峯　浩一　殿 |
| 祝電 | 日本郵船株式会社　代表取締役社長 | 長澤　仁志　殿 |
| 祝電 | 日本郵船株式会社　専務執行役員 | 小山　智之　殿 |
| 祝電 | ＢＥＭＡＣ株式会社　代表取締役社長 | 小田　雅人　殿 |
| 祝電 | 三浦工業株式会社　代表取締役社長執行役員ＣＥＯ | 宮内　大介　殿 |
| 祝電 | 三浦工業株式会社　舶用事業ブロック長 | 山本　健士　殿 |
| 祝詞 | | 山村　滋　殿 |

## ＜慰霊祭実施概要＞

日　時：令和 4 年 1 月 11 日（火）10:00～

場　所：弓削商船高等専門学校　第 2 体育館

形　式：神式（高浜八幡神社神官 1 名）と仏式（願成寺僧侶 1 名）

次　第：① 開式のことば

② 祭文奉読

③ 神式行事

④ 仏式行事

⑤ 遺族代表挨拶

⑥ 閉式のことば

## ＜慰霊祭＞

創立記念日である 1 月 11 日（火）、弓削商船高等専門学校創基 120 周年・高専創立 50 周年記念事業として慰霊祭を挙行し、本校卒業生および関係者故人のご遺徳をしのび、心から哀悼の意を表するとともに、ご冥福をお祈りしました。

会場は招魂碑前の芝生を予定していましたが、悪天候のため、第 2 体育館へと移動しました。来賓として上島町長と教育委員会教育長をお招きし、学内や町内からの同窓生、遺族の方など約 30 名が参列しました。

慰霊祭は柏木同窓会長の祭文奉読から始まり、神式行事、仏式行事と行われ、遺族代表として町内在住の川野様から同窓生である亡き父や夫への思いと感謝の意が述べられました。

開式の様子

祭文奉読の様子

神式行事の様子

仏式行事の様子

遺族代表挨拶

＜弓削商船高等専門学校創基１２０周年・高専創立５０周年記念事業後援会会則＞

制定　令和２年１０月２７日

（名称）

第１条　本会は、弓削商船高等専門学校創基１２０周年・高専創立５０周年記念事業後援会と称する。

（目的）

第２条　本会は、記念事業に協力し、援助することを目的とする。

（事業）

第３条　本会は、前条の目的を達成する為、次の事業への協力、援助を行う。

(1) 記念式典
(2) 記念祝賀会
(3) 記念講演会
(4) 創基１２０周年記念基金
(5) その他行事

（役員）

第４条　本会に次の役員を置く。

(1) 会長　１名
(2) 副会長　若干名
(3) 理事　若干名
(4) 監事　２名

第５条　本会に名誉会長、及び、顧問を置く。

第６条　本会に事務処理をする為、幹事若干名を置く。

第７条　会長は、弓削商船高等専門学校同窓会会長を充て、会務を統括し、会を代表する。

２　副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある時は、あらかじめ会長が指名した副会長がその職務を代行する。

３　理事は、会務を運営する。

４　監事は、本会の事業等を監査する。

第８条　会長以外の役員、名誉会長、及び、顧問は、会長が委嘱する。

２　役員、名誉会長、及び、顧問の任期は、第２条の目的達成までとする。

（役員会）

第９条　創基１２０周年・高専創立５０周年記念事業の援助に関する重要事項を審議する為、役員会を置く。

２　役員会は、会長、副会長、及び、理事をもって組織する。

３　役員会は、会長が招集し、その議長となる。

（募金）

第１０条　募金は、募金趣意書、及び、募金要項によって実施する。

（事務局）

第１１条　本会の事務局は、弓削商船高等専門学校内に置く。

（解散）

第１２条　本会は、第２条の目的達成をもって解散する。

２　会長は、解散にあたり、事業報告書、及び、創基１２０周年記念基金の事業計画書を作成する。

（雑則）

第１３条　この会則に定めるもののほか、本会の運営に関し必要な事項は、会長が別に定める。

附　則

この会則は、令和２年１０月２７日から施行する。

＜弓削商船高等専門学校創基１２０周年・高専創立５０周年記念事業委員会設置規則＞

制　定　令和２年３月１９日

（設置）

第１条　弓削商船高等専門学校（以下「本校」という。）に弓削商船高等専門学校創基１２０周年・高専創立５０周年記念事業委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（審議事項）

第２条　委員会は、次の事項を審議する。

(1) 事業計画に関する事項
(2) 資金計画に関する事項
(3) 事業の実施に関する事項
(4) その他、前３号以外の記念事業に関する事項

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1) 校長
(2) 副校長
(3) 各学科長、総合教育科長及び専攻科長
(4) 図書館長
(5) 事務部長
(6) 総務課長及び学生課長

（委員長）

第４条　委員会に委員長を置き、校長をもって充てる。

２　委員長は、委員会を招集し、その議長を務める。

３　委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

（委員以外の者の出席）

第５条　委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

（実行委員会）

第６条　委員会に、事業計画を実施するための実行委員会を置くことができる。

２　実行委員会に関する必要な事項は、委員長が別に定める。

（庶務）

第７条　委員会の庶務は、総務課において処理する。

（雑則）

第８条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員長が別に定める。

附　則

この規則は、令和２年３月１９日から施行する。

# ＜寄附一覧＞

［50 音順・敬称略］

＜企業・団体＞

株式会社アイエスシー
株式会社アイチコーポレーション
株式会社アイメックス
株式会社赤阪鐵工所
アカマツ株式会社　今治営業所
浅川造船株式会社
有限会社有吉水道
アンデックス株式会社
イーグルシップマネジメント株式会社
イイノガストランスポート株式会社
今治ヤンマー株式会社
岩城造船株式会社
イワキテック株式会社
因の島ガス株式会社
株式会社インフォコム西日本
インラコジャパン株式会社
潮冷熱株式会社
宇和島運輸株式会社
株式会社エコ・テック
エコン株式会社
エスエイチマーウェル株式会社
エヌエスディ株式会社
NS ユナイテッド海運株式会社
愛媛海運株式会社
株式会社愛媛銀行
愛媛県旅客船協会
ＭＭＳＬジャパン株式会社
大浦汽船株式会社
越智機械工業株式会社
越智電機産業株式会社
社会福祉法人海光園
海鳳海運株式会社
鹿児島船舶株式会社
春日海運株式会社
株式会社カネトモ
上島町
有限会社カミジママネジメント
亀川設備工業株式会社
かもめプロペラ株式会社
株式会社ガルバ興業　船舶部
川近シップマネージメント株式会社
川崎汽船株式会社
川重原動機工事株式会社
喜多浦海運株式会社
株式会社北四国警備保障
協同エンジニアリング株式会社
共友工業株式会社
株式会社光電製作所
神戸ペイント株式会社
株式会社コトラシステム
相方印刷株式会社
三愛富士株式会社
三信船舶電具株式会社
三徳船舶株式会社
山友汽船株式会社
株式会社三和ドック
敷島汽船株式会社
四国溶材株式会社
島田燈器工業株式会社
嶋本ダイカスト株式会社
正栄汽船株式会社
株式会社商船三井

＜企業・団体＞

株式会社新来島どっく
新中央工業株式会社
菅原汽船株式会社
株式会社 SCREEN GP サービス東日本
株式会社スチールハブ
株式会社スポーツショップワタナベ
セイホ工業株式会社
一般社団法人全日本船舶職員協会
株式会社綜企画設計
株式会社タイトー設備工業
ダイハツディーゼル四国株式会社
株式会社大宝組
大洋電機株式会社　群馬事業所
株式会社タガ
株式会社橘屋
株式会社タニグチ
ツネイシクラフト&ファシリティーズ株式会社
常石造船株式会社
株式会社帝国機械製作所
洞雲汽船株式会社
株式会社東栄ホールディングス
洞海マリンシステムズ株式会社
東京計器株式会社
東慶海運株式会社
東洋建設株式会社
戸田汽船株式会社
内海曳船株式会社
内海造船株式会社
株式会社中北製作所
株式会社ナカタ・マックコーポレーション
株式会社西日本流体技研
株式会社ニチゾウテック
日信電子サービス株式会社
日東電工株式会社
日本オーチス・エレベータ株式会社
日本海事興業株式会社
株式会社日本海洋科学
日本舶用エレクトロニクス株式会社
日本郵船株式会社
株式会社日本リフツエンジニアリング
日本栄船株式会社
日本海洋事業株式会社
日本ガスライン株式会社
早駒運輸株式会社
株式会社ハラプレックス
株式会社ビーアンドエス・エンタープライズ
ＢＥＭＡＣ株式会社
株式会社ひめぎんソフト
株式会社廣昭
備後共同汽船株式会社
ファーストマリンサービス株式会社
福神汽船株式会社
有限会社ふじい
ふじた住設
富士電機株式会社
富士貿易株式会社
株式会社ホワイトライン
眞鍋造機株式会社
三浦工業株式会社
三ツ浜汽船株式会社
村上石油株式会社
株式会社矢野海運
山中造船株式会社
ヤンマーエンジニアリング株式会社
弓削商船高等専門学校後援会
ユニトラ海運株式会社
株式会社ユニバーサルマリン
株式会社 LAC ホールディングス
ワールドマリン株式会社
ワタナベプリント株式会社

以　　上：１３２社・団体
匿名希望：　１９社・団体
計　　：１５１社・団体

＜個人＞

青野　泰晋
井瀬　　潔
井上恵津子
岩堀　宏治
大石　健司
加藤　明浩
兼定　　孝
木村　隆一
楠川　量啓
清水　　透
須賀　達也
曽根　敏邦
滝口　正三
田邉鉄太郎
西野　弘親
不動　俊樹
古荘　雅生
三好　貴廣
山尾　徳雄
山村　　滋
四谷　　亘
和氣家孝夫

以　　上：２２人
匿名希望：１１人
　計　　：３３人

＜同窓会＞

青島　　忠
青砥圭士郎
青野　誠一
赤瀬　徳男
赤瀬　敏興
赤瀬　　基
赤瀬　亮祐
赤瀬　　渉
吾妻　文雄
赤松　健康
秋月　恭介
秋本　朋之
芥川　　誠
明坂　昇待
浅野　正路
芦内　　隆
阿部　勝則
阿部　雅之
天羽　喜博
荒木　英治
荒木　　圭
有田　耕三
池内　克徳
池内　　寛
池内　　満
池田　　篤
池田　匡孝
池田　富一
地本　直弘
池本　史敏
井崎　一洋
石川　広光
石川　文夫
石﨑　嗣夫
石長　宜俊
石村　修司
磯田　四郎
伊田　照夫
伊田　博永
市河　　望
一矢　凌馬
井手　暁郎
伊藤　統康
井上　　敦
井上　健二
井上　皓介
井ノ上貴之
井上　　徹
猪塚　　治
今岡　拓己
入江　史城
岩崎　和志
上杉　雅伸
上田　　楓
上田　潤輔
植田　純也
植田　晶三
上林　紀久
魚津　芳郎
氏田　又文
氏原　　易
内田　　毅
馬越　　梓
梅本　　勲
浦田　　建
浦本　鴻一
榎本マユミ
大石　勝文
大川　圭三
大河哲三郎
大北　義徳
大河内昌三
大島　規嗣
太田垣剛男
大田垣　実
大谷　照彦
大塚　崇正
大西　　修
大西　英男
大野　晃照
大野　光久
大野　　稔
大峯　俊博
大森純一郎
大森　保男
緒賀　龍司
岡田　光平
岡田　昭二
岡野　育志
岡野　孝紀
岡野　裕樹
岡野　弘志
岡野　正志
岡村安一郎
小川　圭一
沖本　和也
奥井　是次
奥田　　良
尾後　邦洋
小田原照明
越智　　要
音泉　賢治
小野　尚一
小野　榮雄
尾野村慎二

＜同窓会＞

小畑　実
小原　茂
織田　篤
織田　憲俊
織田　隼舞
織部　弘
柏木　晃
柏木　伸二
柏木　孝
柏木　実
梶原　弘司
片上　則夫
片桐　修三
片山　明彦
片山　清
片山　茂
勝木　輝明
桂城　在和
金山　秀勝
上大迫大気
河合　昭
河内　健
川上　明勲
川上　健彦
川上　博照
川口　茂之
川崎　清暢
川﨑　壮庸
河西　秀亮
川本　昌平
菅　伸一郎
神原　宏茲
菊地　和也
北本　明秀
木下　一延
木下　健
木原　二郎
草木　利幸
久保喜八郎
久保勇太郎
熊沢　紅二
久米　千章
久米　道也
蔵田　耕一
倉橋　明之
倉松　茂行
黒河　哲次
黒川日出夫
黒河　耀工
黒川　良樹
桑島　修弘
桑田　収三
小池　信雄
河野　康司
河野　理博
河野　龍志
小坂　雅芳
小島　謹治
児玉　憲明
後藤　稔
此枝　伸
小林　明子
込山　洋一
近藤　一昭
近藤　勝哉
近藤　清
佐伯　優
戝前　正美
佐尾　治作
酒井　正教
坂口　秀清
坂本　聡
坂本　武
櫻田　剛彦
佐々木　勝
佐々原　覚
佐藤　忠
佐野　茂
澤田　裕之
沢田　吉史
塩崎　治久
篠原　昌宏
芝　修次
芝山　基
島口　悟
島田　恒
島本　和司
白石　憲史
白石　整司
白石　卓見
白石　徹
白石　祐輝
白石　義憲
白川　光晴
白山　精治
塩飽　智喜
新川　陽葉
新家谷　聡
新谷　昂平
新谷　久典
杉本　紘一
須佐美智嗣
鈴江　俊夫
鈴木　邦裕
首藤日登志
清家　健二
瀬野　利三
高尾　幸徳
高垣　毅
高垣隆太朗
高木　基旨
田頭　忠次
高橋　恒雄
高橋　宏明
瀧口　一男
滝口　智
瀧本　雅幸
田口　徹
田口　雅都
田窪　健二
宅間　寛
詫間　良三
竹井　優
竹内　健二
竹内　傳
竹内　眞
武川　克之
竹田　英樹
武村　雅明
田坂眞一郎
多田　光男
立花　綾野
立花　勝枝
辰野　信光
伊達　勝志
伊達　繁樹
蓼原　亮一
田中　和也
田中　史志
田中　睦夫

＜同窓会＞

谷　繁
谷田　秀樹
谷本弘太郎
谷本　繁寿
田畑　邦晃
田房　正宏
田部　和人
丹下　聖吾
千葉　明
辻　誠一
辻　正弘
辻　美徳
津田　道夫
堤　輝雄
寺内　大造
寺岡　俊明
寺田　由充
十亀　宏輔
土岐　好文
徳岡　誠
得能　英夫
戸田順一郎
富　一美
冨田　弘
艫居　芳昭
友野　典正
中　哲夫
永井　真一
永井　一
長尾　隆之
長尾　尚
中岡　清治
中岡　紀人
中川　克二
中川　英範
中澤　孝樹
中島源太郎
中島　良三
中条　薫
中田　正人
中塚　俊嗣
中西　歳明
中原　良弘
中平金次郎
中村　一駿
中村　憲博
中矢　眞央
永易　久和
新家　敏高
西谷　直記
西谷　勇二
西村　政夫
西本　知和
新田　浩貴
二宮　達寿
庭瀬　博徳
根岸　珠文
野崎　正則
野田　隆二
野間　昭宣
野間　博文
野村　末義
橋本　勲
橋本　公伸
橋本　三郎
橋本　裕
蓮本　正
長谷川武英
長谷部伸治
畑中　穣
畑中　義夫
畑中　隆一
花澤　利男
英　和夫
濱尾　弘宣
浜咲　昭雄
濱田　勝弘
浜田　忠勝
浜田　司
浜田　展吉
濱田　泰典
浜田　芳久
濱中　一浩
濱部荘四郎
浜村　輝星
林　昇
林　寛
原　亮
原　英三
原　理
原田　準
伴　知治
伴　知英
日朝　俊哉
日浦　幸弘
日笠　吉彦
久　金光
平井　憲二
平井　真幸
平川　和男
平櫛　善己
平塚　信義
廣瀬　英海
弘田　勲
廣松　孝紀
深瀬　寛
福井　正揮
福崎　満幸
福崎　泰志
福島　嘉満
福田　甫
福場　奏
福原　義孝
藤岡　隆
藤岡　誠
藤川　祥子
藤川　利信
藤木　和彦
藤沢　郁也
藤澤　直樹
藤瀬　郁夫
藤田　和史
藤田　太郎
藤田　裕
藤目　定義
藤本　隆史
藤本　真之
藤原　孝士
藤原　隆征
藤原　利明
藤原　裕太
古井　礒
古川　亮輔
古庄　考一
古田　稔
古西　秀則
古谷　明雄
星野　晃
堀内　智明
堀内　靖裕

＜同窓会＞

堀川　広了
本多　祥二
本多　永長
前田　謙一
前田　規敬
前田　元
眞木　秀彰
牧　洋至
巻幡　明
松井　優朗
松浦　天里
松尾　健二
松岡　静男
松岡　誠
松下　拓
松下　則幸
松原　好弘
松本慧士朗
松本健一郎
松本　正浩
松本　元行
松本　裕司
真鍋　敦志
真鍋　治
丸岡　博三
三浦　和也
三浦　清弘
三浦　昇平
三浦　拓海
三浦　政則
三阪　弘樹
三須　吉彦
水野　正明
溝口　聖司
溝渕　修治

御手洗　宏
道脇　弘俊
光益　浩
港　明廣
三村　隆
宮川　正喜
三宅　一郎
三宅　順三
三宅　久直
宮崎　憲二
宮下　宗和
宮下　宗敏
宮田　涼一
宮本　宝
宮本　正義
宮脇　洋司
三代崎誠治
三好　邦社
三好　浩一
三輪　俊助
三輪　史郎
村井　嗣哉
村井　久
村井　昌美
村上　茂
村上　真二
村上　武雄
村上　忠和
村上　英生
村上日出生
村上　秀樹
村上　英憲
村上　幸義
村上　佳廣
村嶋　秀

村松　輝雄
村山凜太朗
本告　晃久
森　健介
森　俊治
森井　和則
森田　一男
森田　任紀
森成　哲也
森本　茂
森山　真也
森山　丈夫
安井　修三
安保　義雄
柳原　武彦
矢野　光生
矢野　芳秀
山内　聡
山内　昌也
山内　勇輔
山岡　照喜
山口　忠義
山口　学
山崎　章宏
山崎　哲史
山崎　俊信
山崎　秀一
山路　晴康
山路　良三
山下　勝廣
山下　英人
山田　久夫
山中　昭大
山原　豊
山本　唯志

山本　敏郎
山本　雅規
山本　雅也
山本　貢
山本　六男
山本　幸男
横田　高弘
横山　太
吉家　茂(高専７期有志代表)
吉川　規良
吉川洋次郎
吉田　堯
吉田　元之
吉原　昭三
吉本　卓司
米田　秀樹
和田　忠雄
和田　利久
和田　勇一
渡口　和洋
渡部　市郎
渡辺　重人
渡部　剛
渡部　辰衛
渡邊　司
渡邊　智基
渡部　英利
渡邊　保克

以　　上：５１８人
匿名希望：　　４人
計　　：５２２人

＜教職員＞
池田　真吾
岩崎　俊佑
加藤　　博
釜井　由景
木下つる代
葛目　幸一
髙岡　俊輔
瀧本　笑子
田房　友典
DAVAA GANBAT
鶴　　秀登
寺澤　達也
中根　教道
藤本　隆士
益崎　真治
益崎　智成
松下　恭輔
村上　知弘
村上　竜一
森　瑛太郎

以　　上：２０人
匿名希望：２６人
　計　　：４６人

# ＜編集後記＞

令和 3 年 11 月 12 日、新型コロナウイルス感染症予防対策を行ったうえで本校創基 120 周年・高専創立 50 周年の記念式典行事を開催し、滞りなく終了することができました。100 周年記念事業の際には、追録を紙媒体で発行しておりましたが、今回は本校ホームページ上での公開となり、時代の流れを感じるとともに多くの人に情報を伝えることができるようになった技術革新の素晴らしさを改めて実感しております。

本追録も実に多くの方々のご協力を得て世に出すことができました。編集委員一同、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

「百二十周年記念誌」ならびに本追録をご覧になれば、本校の 120 年の歩みとその重さが感じ取られ、感慨もまたひとしおでありましょう。今後も本校が皆様の心のよりどころになるよう、“チーム弓削商船高専”で努力する所存ですので、引き続きお力添えを賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

（髙岡　俊輔）

編集ワーキンググループ

| | | |
|---|---|---|
| 編 集 長 | 髙岡　俊輔（商船学科） | |
| 編集委員 | 村上　知弘（商船学科） | 衣川　金利（事務） |
| | 多田　光男（商船学科） | 寺澤　達也（事務） |
| | DAVVA GANBAT（電子機械工学科） | 宇崎　博文（事務） |
| | 髙木　　洋（情報工学科） | 渡部　拓也（事務） |
| | 長尾　和彦（情報工学科） | 羽藤　菜紗（事務） |
| | 長井　弘志（電子機械工学科） | 村上　竜一（事務） |
| | 雙知　延行（総合教育科） | 大森慎太郎（事務） |
| | 久保　康幸（総合教育科） | 木下　英明（事務） |